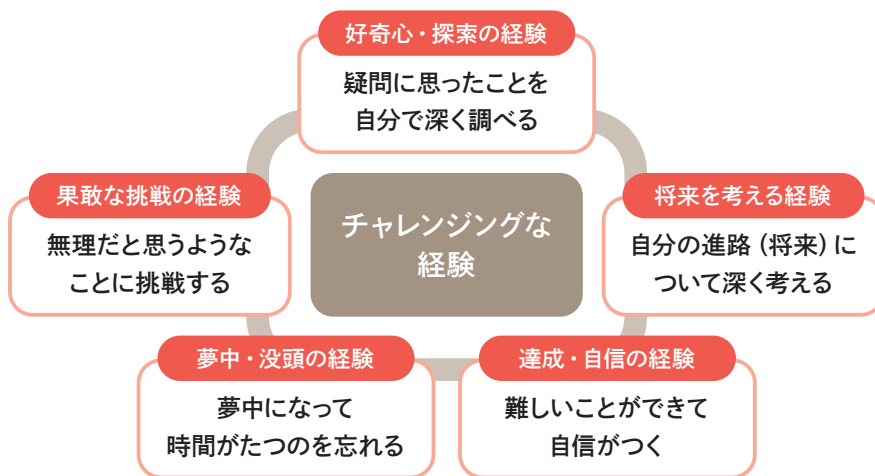


# 「チャレンジングな経験」が 子どもにとって大切な理由とは？

子どもの成長には多様な経験が不可欠であり、現行の教育課程でも経験から学ぶことが重視されている。では、子どもはどの程度深い経験を積み、その経験からどのような影響を受けているのか。今回は「チャレンジングな経験」の意義について、調査結果を基に解説する。

## 1 「好奇心・探索の経験」「果敢な挑戦の経験」は2～3割にとどまる

図1 「チャレンジングな経験」の定義



### 「夢中・没頭の経験」は6～7割

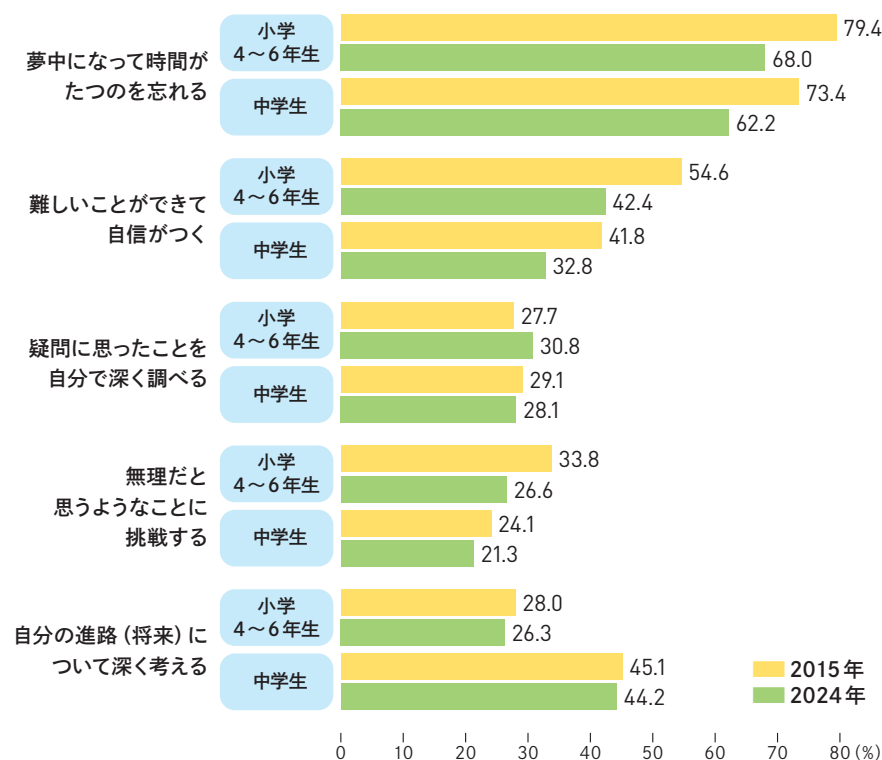
子どもにとって経験は、単なる活動の積み重ねではなく、成長に不可欠な要素だ。経験主義で有名なアメリカの哲学者ジョン・デューイは、「子どもは深い経験を通じて自己理解を深め、問題解決能力を身につける」と述べている。では、子どもはどの程度、そうした経験を積んでいるのか。子どもの成長に役立つと考えられる5つの経験について「チャレンジングな経験」(図1)と定義し、1年間に経験した割合を調査した。

図2は、2015年と2024年の調査結果を学校段階別に示したものだ。

2024年の調査を項目ごとに見ると、「夢中になって時間がたつのを忘れる」経験ををした子どもは6～7割と、比較的多かった。しかし、「難しいことができて自信がつく」経験は3～4割、「疑問に思ったことを自分で深く調べる」経験や「無理だと思ふようなことに挑戦する」経験は2～3割にとどまった。子どもが様々なことに挑戦し、関心を広げることが容易ではないようだ。一方、「自分の進路(将来)について深く考える」経験は、小学4～6年生の段階では3割に満たないが、中学生では4割を超えた。高校進学が近づくと、進路について深く考える経験が増えるのだろう。

経年変化を見ると、「夢中になって時間がたつのを忘れる」経験や「難しいことができて自信がつく」経験は、小・中学生ともに減少している。コロナ禍の影響もあって、何かに集中したり、困難を乗り越えたりするような経験が得にくくなっているのかもしれない。充実した経験が減っているとすれば、気がかりな傾向である。

図2 1年間に「チャレンジングな経験」をした割合(経年変化、学校段階別)



注) 数値は「この1年くらいの間に、あなたは次のようなこと経験しましたか」という質問に対して選択した比率(複数選択、%)。

出典 「子どもの生活と学びに関する親子調査 2024」

東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所が共同で立ち上げた「子どもの生活と学び」研究プロジェクトによる調査。小学1年生～高校3年生までの親子約2万組を対象に2015年から毎年実施。子どもの成長のプロセスとそれに影響を与える要因を明らかにしている。本報告は2024年までの調査結果による。

◎詳細は下記ウェブサイトをご覧ください。

[https://benesse.jp/berd/shotouchutou/research/pdf/oyako\\_tyosa\\_2024\\_0326.pdf](https://benesse.jp/berd/shotouchutou/research/pdf/oyako_tyosa_2024_0326.pdf)



データ解説

ベネッセ教育総合研究所  
主席研究員

木村治生 きむら・はるお



専門は社会調査、教育社会学。子ども、保護者、教員を対象とする意識や実態の調査研究、学習のあり方についての研究などを担当。文部科学省、内閣府などの審議会や委員会の委員を歴任。

## 2 「チャレンジングな経験」は、学習意識や行動と関連している

図3 「チャレンジングな経験」と自己肯定感（経験別、学校段階別）の関連

●自分のよいところが何かを言うことができる

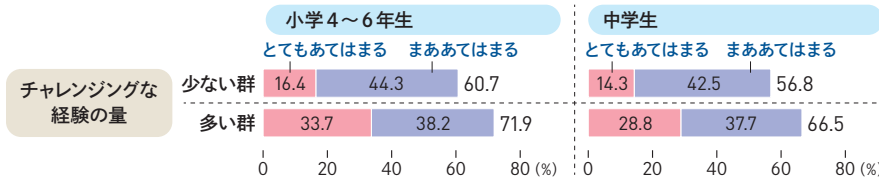


図4 「チャレンジングな経験」と社会への関心（経験別、学校段階別）の関連

●社会の出来事やニュースに関心が強い

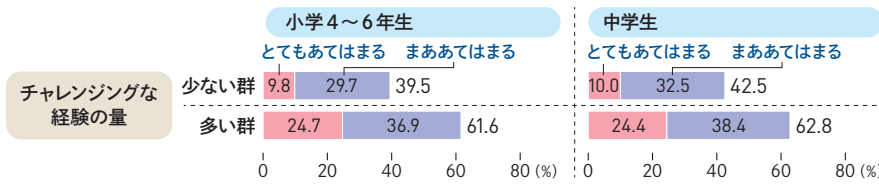


図5 「チャレンジングな経験」と勉強が好き（経験別、学校段階別）の関連

●勉強がどれくらい好きか

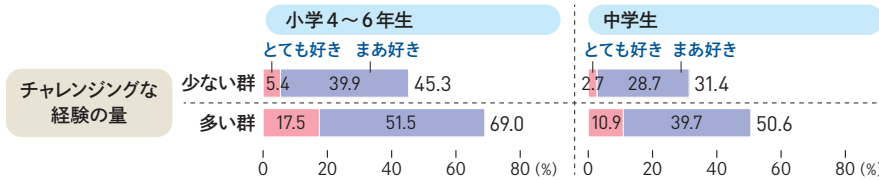


図6 「チャレンジングな経験」と学習時間（経験別、学校段階別）の関連

●学習時間（宿題+家庭学習+塾の時間の合計、1日あたり）

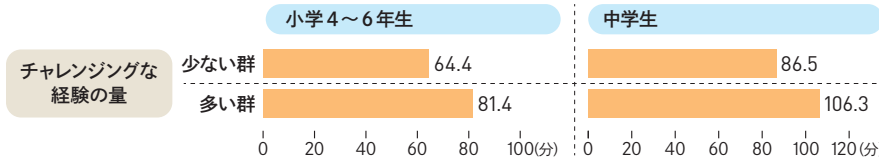
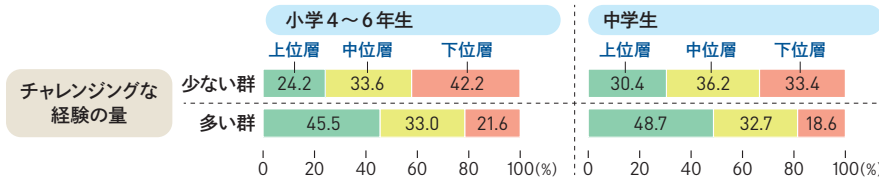


図7 「チャレンジングな経験」と学業成績（経験別、学校段階別）の関連

●学業成績を上位層、中位層、下位層に分類



注) 学業成績は、国語、算数・数学、理科、社会、英語の5教科（小学4年生のみ英語を除く4教科）の自己評価（5段階）について合計し、上位層・中位層・下位層がそれぞれ3分の1になるように分けた。

### 挑戦の経験が学習時間に関連

では、「チャレンジングな経験」はどのような要素と関連しているのか。2024年の結果を用いて、5つの要素について「チャレンジングな経験」の量が少ない群と多い群に分けて比較した。

「自分のよいところが何かを言うことができる」(小学4～6年生)割合は、「チャレンジングな経験」が少ない群の60.7%に対し、多い群は71.9%と約11ポイント高く、そうした傾向は中学生にも見られた(図3)。「チャレンジングな経験」は、自己肯定感のような心理面の充実と関連していると考えられる。

次に、学習意識や行動との関連を見ていく。「チャレンジングな経験」の量が多い子どもは社会の出来事に関心が強く(図4)、「勉強が好き」な割合も高かった(図5)。さらに、「チャレンジングな経験」の量が多い群ほど、学習時間も長い傾向がある(図6)。そうした学習意識や行動のプラス面を反映して、「チャレンジングな経験」の量が多い群では、学業成績がよい傾向が見られた(図7)。成績上位層の割合は、小学4～6年生では少ない群の24.2%に対し、多い群は45.5%とほぼ倍近くだった。

以上のデータは、「チャレンジングな経験」が子どもの自己肯定感を高めるだけでなく、学習意識や行動にもよい影響を与える可能性を示唆している。経験を通じて得られる達成感や自己肯定感は子どもの意欲や積極性を促進し、長期的な成長を支える重要な要素でもある。学校にも、子どもが「チャレンジングな経験」をし、その経験を振り返って意味づけをする機会を設け、内面からの成長を促すことが求められるだろう。